

東北支援活動報告

2011年5月2日(月)~5日(木)

土川俊樹

5月の連休に東北地方に行ってきました(その1)

3月11日の震災で津波の被害を受けた、岩手県の大船渡市に物資の運搬と炊き出しのお手伝いに人生初のボランティア活動に参加してきました。

(きっかけ)

4月中旬、高校の同年生から東北出身の写真家の呼びかけで始まった今回の震災の被災地への支援活動の話を聞いて、今までならば義捐金をちょっとして後は傍観者でいた自分が今回は何故か、自らの目で現地を訪れてみたくなりました。

50才という大台に乗り、サラリーマン人生の先も見えて来たこの時期、阪神大震災の際には現地支援の機会もありながら踏み出せなかった後悔もあって自分としては今回一步踏み出してみたいなりました。

(疑問)

3月11日の当日、東京でも感じた大きな揺れ、映像に写される津波の脅威。

これも高校の出版社に勤務する同年生から吉村昭著「三陸海岸大津波」を紹介され、明治、昭和に渡り3度の津波を経験しながら、ある面教訓が生かされなかった疑問も抱くようになっていました。

支援グループのミーティングに参加して、現地は何を求めているのか、我々に何が出来るのかと熱い議論が交わされます。でも、現地の情報が入りません、直前までどの避難所に行くのか決まりません。現在の情報化社会において行政から有効な情報を何故得ることが出来ないのか。最終、大船渡市役所で炊き出しのデモンストレーションを行って、その後の訪問する避難所が決まるという予定に不満を感じての出発となりました。

(出発)

総勢14名で、3日の11時に大船渡市役所集合ということで、私は炊き出し班5名の一員として、ハイエースをレンタカーで調達、支援物資を積みこんで東京を出発しました。

5月の連休に東北地方に行ってきました(その2)

(往路)

2日の連休前夜、やや渋滞気味の首都高を早めに通過、東北自動車道を快走。

日付が変わる直前に一旦、宇都宮工を降りて再度東北道へ、休日割引1000円の恩恵を受けません。(わざわざ降りる必要があったかは不明)

ゴールデンウィーク、中央道ではたびたび渋滞にはまった経験はあるも、東北道で宇都宮以北は車では初めて、中央道以上の渋滞の記憶と流石に今年は例年に比べて観光客は少ないの読みが交錯しました。

東北地方への物資を積み込んだ車も多く、サービスエリアは渋滞、帯同する車と連絡をとりつつ早めに給油をしドライバー二人で交代しながら、一路北へ。

仙台を過ぎるあたりからめっきり車の数が減り、夜が明けてきました。

まだ桜の花が残り、新芽の緑が少しずつ鮮やかになりつつある田舎で見られた懐かしい山の風景が続きました。

予想はしていましたが、仙台から先も東北は長い道のりが続き、それでも集合時間に大船渡市役所に到着しなくては何も始められないと東北道を降りて一般道を走り続け、予定より一時間以上前に大船渡市役所に到着しました。

(大船渡市役所その1)

市役所は河岸段丘の上の段の高台にあり、ボランティアと思われる車もありました。

そこでちょっとしたトラブル、初めてのタウンエース、荷台には物資と炊き出しの道具などが隙間なく積まれていてルームミラーは見えず。だいぶ感覚に慣れて来たので、サイドミラーを確認しながらバックで駐車場に入れる際調子よく下がり過ぎて、反対側の車に接触してしまいました。慌てて車を少し前に出して置きましたが、反対側の車にはお年寄りが乗っていて車が動いたと、息子に告げ、当たったのではないかとご指摘。ゆっくり押したので傷はつかなかったのと正直に謝ったのとボランティアの車であることが功を奏したのか、丸く収まりました。

初のボランティア活動に入れ込み過ぎていた自分に反省をして、自らが事故を起しては何の意味もないと戒めました。

(大船渡)

集合時間に時間があるので、港に行ってみようと市役所を出発、そこには映像で何度となく見た光景が現実の物として続きました。

道路部分は確保されていますが、左右は瓦礫の山、それも重機が入ったのも僅かでしょうから。簡単に動かすことができるものをただ積み上げた状態が続きました。そこから湾の北側の太平洋セメントの工場地帯に進みました。漁港とセメント工場が隣接する地域、中身が全て流されてしまった工場、でもそこには先ほどの市街地とは違う整備の進んでいる雰囲気少しありました。やはり資本のあるところは復旧へのスタートが早い、反面、一般市民の地域の厳しさを感じてしまいました。

(暮石海岸)

暮石で有名な海岸、観光スポットなのですが、吸い寄せられるように向かいました。途中の街は自宅が残っているところで少しずつ片づけが始まっているところもありましたが、ほとんどは震災時のままの地域を進みました。

暮石海岸、昔地理で習ったリアス式海岸、絶壁と岩、太平洋の波が打ち寄せては波しぶきが上がっています。

しかし、そこから見える太平洋は微笑みかけるように穏やかな海でしかありません。

理屈では絶壁で進路を断たれた波が低地の湾の集中し、大きな津波になることは解っていても、

地震当日のどす黒い海岸線が押し寄せる光景が同じ海だとはどうしても思えません。

自然の厳しさを日頃から経験している地域の人達を温かく包み込む海の美しさ、過去の津波の教訓も実体験したものと言い伝えたものとの人間側が捉え方に違いがでたのではないかと感じました。

人間の一生と地球の一瞬、あまりにもスケールが違い過ぎます。

5月の連休に東北地方に行ってきました(その3)

(大船渡市役所)

東京からの写真家の別動隊、青森を回ってきた今回の活動のリーダーの写真家の岩木さんチームも合流しました。

当初は我々の炊き出しのデモンストレーションということでナン+カレーとコーヒーを市役所の職員に提供する予定でしたが、市役所のロビーの一角で始めると物資を求めて来庁している人からも希望があり、いきなり本番が始まりました。

炊き出し道具の増強、材料の補充を行い、手さぐりの中でそれぞれの役割が確定。私とえば温めたカレーを器に移す単純作業をキープ。

ナンの食感、カレーと煎れたてのコーヒーの匂い、受け入れられる好感触を一同が得るなか、震災後、休みなく働く市役所の職員の方にも喜んで頂きました。

東京を出発する前には行く避難所もはっきりしない事に多少なりとも不満を感じていた私ですが、現地を見て、自らの自宅だってどうなっているかも分からないのに働き続けている職員には頭が下がる思いが広がりました。

インフラはもちろん、既成の社会のシステムがずたずたになっている時、やるべきことが次々と起こっていることでしょう。

東京からの訳の分からない団体の炊き出し、物資支援、そんな不確かな物に対して役割を期待することは不可能です。役割を与えること自体がリスクとなります。私の不満はボランティアの名の下のエゴでしかありませんでした。

市役所の出口まで見送ってくれる人、東京からの我々に対する配慮、そんな気まで使って下さる温かい東北の心に触れた思いがしました。

(陸前高田)

市役所の出だし好調を受け、炊き出し予定の避難所に向かいました。

仙台のカメラマンの方の事前交渉と炊き出し能力の説明も市役所での実績から説得力があって順調に進み、夕方の炊き出し準備を始める組と分かれて明日の夕方の炊き出し先の交渉の為、陸前高田に向かう一行に加えてもらいました。

大船渡に隣接する陸前高田、その街に入った瞬間に声を失いました。

何も残されていない。4階まで水に浸かった高田病院、映像で繰り返し報道された馴染のある建物、それは破壊尽くされた町並みが永遠に続く景色の中に浮かんでいる特別な存在のように思えました。

その中で唯一残されたであろうと思われる地区に我々の一団が入りました。

避難所とは違う、物資の受け渡しや自衛隊からの水の補給を受ける公民館、そこでの炊き出しの提案です。

大船渡で好感触を得ていたチームにとってまさに冷水を浴びることになりました。

度重なる要人の来訪、無造作に送られ整理もできない支援物資、それはこの地生まれそしてこの地で生きていく人にとっては必ずしも今必要とするものではない。

この土地では家が建っていることが逆に取り残されたような感覚、どんな人々の思いがあるのかは計り知れない。

地域の中心人物が「皆で支援を受けないと決めた、もっと困って必要とされるところに行って炊き出しをやって下さい」

と我々に告げる。

決して本意ではないと思う。しかし、東京から来て一時しかこの地に居ない我々に対して怒りをぶつけることなく、淡々の語り口調に支援の難しさを痛感させられました。

どこでも簡単に受け入れられると様を考え始めていた私は、この地の人々をここまで追い詰めているものは何か、

どのようにすれば良いのか全く分からなくなりました。

復興へのかすかな希望すらこの地の人々は持ち合わせていないような、我々を見る目が寂しい。

でも、何かが、それは復興の道筋かも知れないし、時間の経過なのかも知れませんが、この地の人々を解きほぐしてくれるものが現れることを願わずにいはいられませんでした。

つづく